ホフマンスタール散文作品の重層構造

――「第672夜のメルヘン」から「アンドレーアス」まで

畠中　美菜子

（前書き）

本稿は，日本オーストリア文学会2021年秋季講演会（オンライン開催　10月1日（金））における畠中美菜子先生（東北大学名誉教授）の講演録である。その文学的価値に加えて，先生を始め東北地区在住の日本オーストリア文学会会員の多くが東北ドイツ文学会会員であることや，東北支部主管による2021年日本独文学会秋季研究発表会（オンライン開催　10月2日（土），3日（日））を機に，この講演が東北大学ドイツ語学ドイツ文学研究室にて行われたことから，講演の活字化と「東北ドイツ文学研究」への寄稿を提案し，畠中先生と嶋﨑啓編集委員長よりご了承を得た次第である。

本稿の編集では，執筆原稿に基づき，口頭発表音声を参照して適宜補足修正を行いながら校訂稿を作成し，最終的に畠中先生に加筆修正を施していただいた。その際，講演の「ですます調」の語り口をぜひ残してほしいと先生にお願いした。なお，手書き原稿の電子ファイル化と講演音声の文字起こしについては，押領司史生氏のご尽力に全面的に負っている。

先述の通り，講演当日には東北大学ドイツ語学ドイツ文学研究室を使用させていただいた。嶋﨑氏と同研究室助手であり東北ドイツ文学会事務局の清水翔太氏には，オンライン発表のための環境設備を整えていただくなど，このときにも多大なご配慮を頂戴した。記して深謝申し上げたい。　（松崎裕人）

はじめに，この詩人の名前フーゴー・フォン・ホフマンスタールHugo von Hofmannsthalについてちょっとお話しします。ホーフマンスタールと伸ばして書く方々もよく見かけますが，私はずっと以前に恩師のベーダ・アレマンBeda Allemann先生から，ウィーンではホフマンスタールと言うようですよ，と言われたことがありました。その後，1984年のことですが，国際ホフマンスタール学会がミュンヘンで開かれた折，ちょう

ど休憩の時間に，詩人のご長女クリスティアーネ・ツィンマーChristiane Zimmer 夫人とお話しする機会がありました。中央大学にいらした松本道介さんもご一緒でしたが，お宅ではお名前をどう発音されるのですか，と伺いました。すると「ホフマンスタールです」というお答えでしたので，私もそれ以来そのように言うことにしております。ホフマンスタール学会は，詩人ゆかりの地で開かれることが多いのですが，ツィンマー夫人のご子息，つまり詩人のお孫さんのアンドレーアス・ツィンマー Andreas Zimmer さんともこの学会で三度お会いしました。アメリカのアーリントンで弁護士をしていらしたので，英語名はアンドルー Andrew となっていましたが，私はご長女よりも孫のこの方に詩人ホフマンスタールの面影を見る思いがしました。手元にある 2000 年の学会の会員名簿を見ますと，名誉会員としてアンドルー・ツィンマー氏とともにロンドン在住のオクタヴィアーン・フォン・ホフマンスタール Octavian von Hofmannsthal の名もあり，おそらく詩人の次男ライムント Raimund のご子息だと思います。このようにお孫さん達の名が作品中の愛すべき人物（オクタヴィアーンは喜劇「薔薇の騎士　*Der Rosenkavalier*」の主人公）から採られているのは何かほほえましい気がしてご紹介しました。

雑談めいたことから始めてしまいましたが，この詩人の散文作品のなかでも詩的散文 lyrische Prosa とでも呼びたいようなもの，例えば今日の話で扱う「道と出会い　*Die Wege und die Begegnungen*」（1907）や「美しき日々の思い出　*Erinnerung schöner Tage*」（1907），「ギリシアの瞬間　*Augenblicke in Griechenland*」（1908-1914）などは，全集や作品集でどのジャンルに入れたらいいのか編集者を悩ませているようです。シュタイナーSteiner の 15 巻本では，年代順に『散文集 1～4 巻　Prosa I- IV』に収められていて分かりやすいのですが，シェラーSchoeller の 10 巻本では『物語，架空の対話と手紙，旅行記　Erzählungen, Erfundene Gespräche und Briefe, Reisen』の巻において，前の二つは「物語」の中に，「ギリシアの瞬間」は「旅行記」の中に入れられています。また，レクラム文庫では三篇とも『物語集　Erzählungen』の巻に入っています。40 巻本の『批判版　Kritische Ausgabe』では，「美しき日々の思い出」だけが『物語集　第 1 巻 Erzählungen 1』に入り，「道と出会い」，「ギリシアの瞬間」は『講演とエッセイ　第 2 巻　Reden und Aufsätze 2』に入っています。このような事情は，ホフマンスタールという詩人の本質に関わることで，彼の文学は固定観念や硬直した境界（Grenzen）にもともと馴染まないのだと思います。彼が好んで用いる「流動的」とか「漂う」とか「揺れる」などの言葉も，そのことをよく表しています。

(1) 「第 672 夜のメルヘン」と「アンドレーアス」

前置きはこの位にして，ここからは「第672夜のメルヘン　*Das Märchen der 672. Nacht*」（1895）や詩人が生涯にわたって取り組みながらついに未完に終わった小説「アンドレーアス　*Andreas*」(1907-1927)，及び他の散文作品を取り上げ，それらの相互関係を明らかにしつつ，彼の文学に特有のモチーフを追ってみたいと思います。まず「第 672 夜のメルヘン」から見て行くことにしましょう。作者 21 歳というごく初期に書かれたこの作品の中に，既に遺作「アンドレーアス」に共通するものを見ることができます。商人の息子と称される主人公は，夏は高地の山村の別荘で，美しい物たちに囲まれ人間的な関係を絶って四人の召使いと暮していますが，その四人の視線が彼の人間としての不十分さ（Unzulänglichkeit）を見ていることに気づき，恐ろしい不安を覚えています。後半の第二部で，大事な召使いを中傷する差出人不明の手紙を解明しようと，彼はウィーンと覚しき街へ下りて行きます。ここから始まる主人公の街歩きは錯綜した迷路そのものです。夕暮の場末の宝石店，その第二の部屋，一つしかない格子窓から見える隣家の菜園，そして第一の温室からさらに第二の温室へと閉塞された空間へと導かれ，ついにこのメルヘンの中心部と思われる場面に至ります。つまり若い召使いに酷似した 4 歳ほどの白衣の少女と，その陰険で悪意にみちた視線との出会いです。私はこの場面を主人公の心の最深部の形象化，自己検閲の場と解釈したいと思います。夢の中の夢，無意識の世界，心の一段と深い層の形象化です。この第二の温室を逃れ出た後，行を改めて「彼は壁に囲まれたある狭い通路に立っていた」と書かれていますが，温室の場とこの一文の間に一種の空白感があり，夢からの覚醒に対応する表現と読むことができます。この後，兵舎のある地区に出て馬に蹴られ惨めな死に至るまでの道すじは，悪夢の続きのようでもあります。彼の歩む迷路は薄明の音のない世界であり，壁や格子に囲まれ，あるいは深い溝の上にかかる板を渡るなど，不安と恐怖にみちています。アルトゥア・シュニッツラーはこの作品を読んで，全体が夢のようでメルヘンらしくない。最後に夢から覚めることにしても良かったのではないかと作者に書き送っています。

小説「アンドレーアス」において，「第 672 夜のメルヘン」で印象的な第二の温室の場面を想起させるのは，この小説断片の終り近く，ヴェネツィアで暮し始めたアンドレーアスが，一人の人格の分裂した二人の女性――これは完成部分には書かれていませんが，創作メモからそう判断されます――マリーア／マリキータ Maria/Mariquita と出会う小さな教会という空間です。アンドレーアスが歩き回るヴェネツィアの街も迷路のような小路（Gassen, Gässchen）ばかりで，サンマルコ広場や大運河，壮麗な館な

どは一切描かれていません。それは「第672夜のメルヘン」に街の中心の賑わいなどが全く触れられていないのと同様です。さて，アンドレーアスは細い路地のつきあたりの水路にかかる石の橋を渡り，小さな卵形の広場に立つ教会に入ります。特別な場であるこの教会に彼が行き来するたびに石の橋を渡ると書かれており，この橋が何か象徴的なものを示しているような印象を与えます。いわば外界から内なる世界へ渡る橋の暗示とも見えます。小さな古い教会は薄暗く，例の女の他には誰もいないとされ，広場にもいつも人の姿はないのです。この薄暗く小さな教会は，あの「第672夜のメルヘン」の第二の温室にも似て，主人公の意識下の世界の形象化と捉えることも可能ではないかと私は考えています。またアンドレーアスが，彼の下宿の主人の娘である女優のニーナ Nina の家を訪ねて来て，足を踏み入れるぶどう棚に覆われた小さな中庭も奇妙な空間です。彼はマリキータと覚しき女にぶどう棚の上の隙間から覗かれるというショッキングな経験をします。しかしニーナのもとへ彼を案内して来た絵描きのゾールジ Zorzi は，この家に中庭などはないと断言し，アンドレーアスの位置感覚は混乱します。

(2)　ケルンテン回想

アンドレーアスのヴェネツィア到着と新しい生活の始まりの間に，ウィーンからの旅の途中，数日を過ごすことになるケルンテンの山村の回想が，完成部分全体の半分ほどの分量で組み込まれています。山村と街という二つの世界が対照的に描かれているという点では，小規模ながら「第 672 夜のメルヘン」にも共通している構成です。「アンドレーアス」断片では大きな農家フィナッツァーFinazzer家の純な少女ロマーナ Romana との出会いが，作者の構想では重要な意味を持つことになる筈でした。錯綜した迷路の街ヴェネツィアと爽やかな風が吹く山村の対比は，後で見るように，ホフマンスタールの散文文学の基本的な構成をなすものと考えられます。

この回想の物語の中に，ウィーンの少年時代のことが想起される箇所がいくつかあります。それはいつも苦い，いわば負の記憶です。ヴェネツィアに来てからも，これが突然彼を襲ってくる場面があります。貯蔵室へ行きパンの塊を切ろうとしてもナイフが空を切ってしまうという，子どもの頃くり返し見た嫌な夢です。この物語はこのように時間的にも幾重にも層をなしていると言えます。

また，この回想の物語の中で特徴的なのは，外界・現実と主人公の内面・夢または夢想との照応関係，重なり合いの場面です。たとえば親しくもあり，よそよそしくもあるようなロマーナと過ごす奇妙な夢を見ていて，彼女に熊手で額を打たれ，ガラス窓に当ったような鋭い音がする。そこで，はっと夢から覚めて窓辺に走り寄るとガラ

ス窓にひびが入っていて，窓枠に一羽の鳥が死んでいるという場面があります。またフィナッツァー家を立ち去る前夜，アンドレーアスが厩に下りて行き，しばらくの間（unbestimmte Zeit）うす暗い空間に立って鳥のさえずりを聞いていると，一条の金色の光が斜めに射して来て厩の扉に当たっている。すると一羽の燕が閃めくように飛びこんで来て，その後からロマーナの唇が現れる。彼女はベッドから出て来たばかりのように素足で髪も垂らしたままで，彼に近づくでもなく避けるでもなく何か言いたげな様子です。彼女は自分自身をそれでしめ殺そうとするかのように細い銀のネックレスを手にもて遊び，それをひきちぎって，その半分をアンドレーアスの手に押しつけ彼にキスをして姿を消す。その銀の鎖の一部は彼の手に残っている，というのです。このシーンはまさに夢とも現実とも分からないように書かれていますが，さりげなくこんな一文がはさまれています。「あらゆることが世界の中で起こり，同時に（zugleich）彼の心の中心で起こった」。夢と現実の境界があいまいな場面ですが，銀の鎖の一部が彼の手に残った，という記述は現実の証しとも思われ，いやこれさえも夢想の一部ともとれるかもしれないのです。読者はこのまま受け取る他ありません。これがホフマンスタールの文学だと言えばいいでしょうか。

(3) 旅立ちと途上

二つの世界が描かれるという点は「道と出会い」にも見られます。この作品では，前半で道と出会いについて瞑想的な思いが美しい表現でさまざまに語られ，忘れられない言葉を語ったという人物アギュール Agur は，いわば自分の心の奥にまどろんでいるような，そして夢に見たことのある人物だと述べられます。そして後半，その夢が鮮やかな色彩にいろどられた視覚的な世界として描かれています。ちなみに，この二つの部分からなる構成は，あの 1892 年作の詩「体験　*Erlebnis*」と非常によく似ています。この詩でも前半で薄明の中の憂鬱な音楽，死が音楽になったのだと瞑想の世界が歌われますが，「だが不思議だ！（Aber seltsam!）」という言葉から後半の夢の世界が開けます。黄色い巨大な帆をかかげた海洋船に乗って故郷の町を通り過ぎる人が，岸辺に立つ子どもの自分自身を見るのです。しかしその人を乗せた船は藍色の川を音もなく滑るように去って行く，というように色彩豊かなくっきりとした視覚的な風景がここでも描かれています。

「道と出会い」で夢の中に現れてくるアギュールは，人生の英知を体現しているアジアの大きな流浪の民の族長（Patriarch）であり，今まさに旅立ちを命じているところです。この旅立ちや旅の途上にあることが，ホフマンスタールの散文作品の一つの特

徴であると言ってもいいかと思います。「ギリシアの瞬間」の第三部「彫像　*Die Statuen*」（1909-1914）の中で，それははっきり語られています。日没後のうす暗い小さな博物館で，語り手の「私」はうるさい学芸員を振り切るようにして，第二の部屋からさらに第三の部屋に入り，そこで衝撃的な出会いを経験します。つまり五体の古代の女性の彫像との出会いです。この第二の部屋から第三の部屋に入って，そこで重要な決定的なことが起こる。あの「第672夜のメルヘン」の商人の息子の温室が思い出されるのではないでしょうか。ここもまた主人公の心の最も深い所が揺り動かされる空間です。「ともにどこかへ流れて行くこと（ein gemeinsames Irgendwohinströmen）」を語り手は感じます。何か流動するもの，何か憧れるもの，どこかから来てどこかへ行こうとするもの，旅の途上にある，そのような感覚が語られます。それは自分の中にもある旅立ちの予感，予感にみちた不安，音のないざわめきを呼び起こします。この立像群を目にした時，これを見るのは初めてではない，という既視感，いわゆる déjà-vu 感に語り手は襲われます。あのアギュールも自分の心の奥深く潜んでいる人物とされますし，「第672夜のメルヘン」の中にも，「見たことがなかったのに四辻がとつぜん夢の中で知っているものに（traumhaft bekannt）思われた」という文章がありました。「私」は立像たちとの交感を「祝祭（eine Feierlichkeit）」と呼び「犠牲（いけにえ）の儀式（eine glorreiche Opferung）」と呼び，「私はこの儀式を行う司祭でもあり犠牲（いけにえ）でもある」と語ります。いけにえの儀式と言えば，1903年に書かれた重要な詩論「詩についての対話　*Das Gespräch über Gedichte*」に出て来るキーワードです。神に捧げようとしたいけにえの牡羊の血を一瞬その男は自分の血だと信じ，一瞬その動物の中で死んだに違いない。溶けこむ（sich auflösen）という言葉をホフマンスタールは好んで使いますが，他のものの中に溶けこむこと，これが象徴ということであり，あらゆる詩の根源なのだ，とガーブリエル Gabriel は友に語ります。「チャンドス書簡　*Ein Brief*」（1902）の翌年に書かれた詩の誕生の確信です。この彫像との交流にいけにえの儀式を持ち出すのは，読者には少し唐突の感がありますが，作者としてはあの詩論に繋がるイメージだったと思われます。

(4)　帰還するところ

最後に小説「アンドレーアス」の凝縮された詩的予告とも言うべき「美しき日々の思い出」をとり上げることにします。1906年から構想され1907年に書かれた詩的散文と呼びたいこの作品には，まさに重層的な世界が描かれています。若い姉弟を案内してヴェネツィアに来た「私」は，夕刻から夜にかけてのこの街の光あふれる美しさを描き出します。舟乗りに誘われて小舟で海へ出て行った姉弟と別れて，大広場の柱廊の間をそぞろ歩きした後，「私」は宿に帰ります。

服を半分着たままベッドに横たわっている夢うつつの状態から，連想のはたらきに導かれて別の世界が展けていきます。「ずっと下でかすかな水音がしている。たぶん小路の噴泉（Laufbrunnen）だろう。いや，あれは村の小路（Dorfgasse）ではない。建物の大理石の階段をなめている海だ」。この聴覚による一瞬の錯覚が，子ども時代を過した山間の村へ登って行く夢を惹き起こすことになります。四隅に松明をつけた馬車に横たわって夜の闇の中を山へと，たぎり落ちる谷川の橋をいくつも渡って懐かしい村へと「私」は登って行きます。山の小川のそばにあるねずの木の茂み（Wacholdergebüsch）は小さいが集まると力強く，そこに入り込むと私はもう決して変身する（sich verwandeln）ことはない，という箇所は意味深いものを含んでいます。朝方になってこの夢を振り返って，こう語られます。「それは眠りだった。そして絶えず新しく目覚めては新しい夢へと入って行った。所有することと喪うこと。私は私の子ども時代を深い山の湖のようにはるか遠くに見た。そしてその中へ，家に入って行くように入って行った。それは自分を持つことであり自分を持たないことだった。すべてのものを持つことであり，何ひとつ持たないことだった」。その村は親しく懐かしい場所であり，高い山の中の深い所にあり，はるかに遠い。「私」にとって一切がある場所であり，現実世界にあっては無に等しいのです。

「アンドレーアス」断片には実に多くの創作メモが残されているので，私たちは作者がこの小説に書き込もうとしていたことの手がかりを得ることができます。メモの最後の所にこのような文章があります。「アンドレーアスのヴェネツィア滞在の結果（Resultat）――彼はもうあの制約されたウィーンの生活に戻ることは絶対できないと感じている」，「アンドレーアスの帰還の旅（Rückreise）――彼は空を見，森の上の小さな雲を見る。その美しさを見，感動する。ロマーナと一緒であればそれが自分の空になるだろう」。アンドレーアスはおそらく自己分裂の危機を克服してロマーナのいるケルンテンの村へ帰って行こうとするでしょう。そしてそれは「美しき日々の思い出」の子ども時代の山村と重なるものと考えられます。改めてこの「美しき日々の思い出」の全体を眺めると，ヴェネツィアの街の美しい夕暮から夜にかけての，いわば外の世界の描写から，やがて水音を媒介としてアドリア海に囲まれたヴェネツィアと噴泉のある山間の村が重なり，そして内面の世界が徐々に展開して行き，つまり子どもの頃のように馬車で高い山間の村へ登って行き，自分が変わることのない所，還って行くべき所に至る，という構図になるでしょう。爛熟した文化都市ウィーンや分裂と変容の街ヴェネツィアの対極としての山村は，やや思い切ったことを述べれば，ゆるぎな

い根源的に詩的なるもの（das Dichterische あるいは das Lyrische）のイメージ化と捉えることができるのではないか，そう私は考えています。

以上，ホフマンスタールの散文作品をいくつか取り上げて，その文学的独創性を解き明かそうと試みてきましたが，そのような試みもこの詩人には無縁とでもいうように，彼の作品は超然として存在し続けるのだと思います。